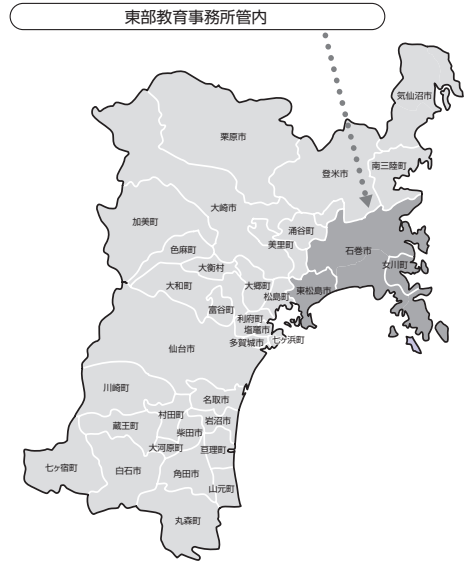


東部教育事務所管内

東部教育事務所管内で、最も多かった記述は養護教諭の職務全般としての振り返りであった。その中でも、「あの状況の中で最善策を考え実行に移すことで精一杯」「被災していることを忘れやるべきことを見つけるだけで精一杯」など、過酷な状況下で養護教諭として精一杯働いた様子が分かる記述、また「医療、衛生面で責任を担う場面が多い」など、養護教諭の責任の重さを感じている記述が目立った。一方では「未熟で何もできなかった」などの記述もあり、自分の働きが不十分で無力であったことを振り返っている養護教諭も多かった。さらに「疲れきって子供を優しく受け止めてあげられず自己嫌悪」など、被災した自分が支援する負担や辛さを感じたり、異動により「“いつも”がわからないことへの不安を抱えたりしながら、日々の執務を遂行していた」ことも明らかとなった。しかし、「アンテナを高くして心の傷を癒せるよう努めていきたい」「心の復興はこれから」といった前向きな気持ちが表現された記述も数多く、気持ちを切り替えて児童生徒と向き合い、頑張っている養護教諭の強さが伝わってくる。振り返りの記述が多いことは、養護教諭が経験したことや想いを振り返り、表現することが必要であったことも表していると考察される。



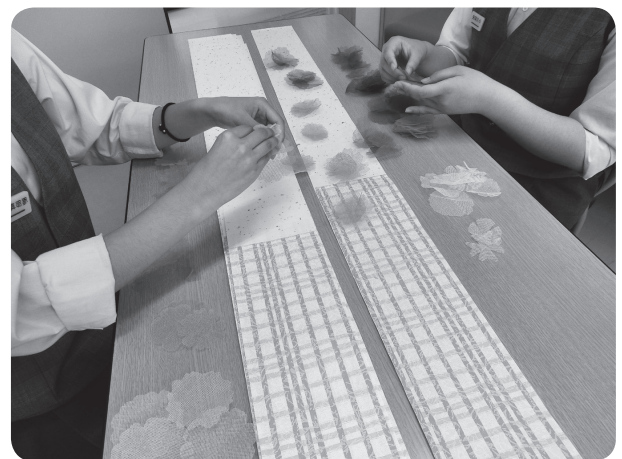
次に記述が多かったのは、避難所運営に関することであった。東部教育事務所管内では、79.7%の小中学校で避難所を開設していたため、気づきや感じたことが多かったと考えられる。避難所運営の中でも救急対応に関することが最も多く挙げられていた。養護教諭が児童生徒以外の様々な避難者（「2000人を超える」「高齢者が7～8割」「入れ替わりが激しい」など）への対応を余儀なくされ、「数日間医療関係者が来られず」「水も出ない中での対応」といった困難や、「医師が来るまで戸惑った」「B型肝炎や破傷風感染などの不安を持ちながら対応に追われていた」という記述から当時の様子が伝わってくる。また、長期間ライフラインが途絶えたことによる環境衛生面に関する困難にとどまらず、津波による校舎の汚染問題の記述がみられた。これは他地区と比べても特徴的である。校舎床に津波浸水がない学校においても、避難者が津波から逃れてやっと避難した際に土足であったことなどが原因となり、多くの学校で同じような校舎の汚染問題があったと推察される。「生徒が血栓予防体操を避難者と一緒に取り組んだ」など生徒の活躍に関する記述も複数あり、スタッフとして一丸となって避難所運営に取り組んでいた様子もうかがえる。

自分自身の被災や避難所運営とも関連して、「先生方も疲労が蓄積」など疲労状態が続いている教職員に関する記述も多かった。多くの養護教諭が「先生方のメンタルヘルスも必要」などと記述し、心のケアが必要であることを感じ、「教員へのケア不足」の現実の中で、「声を掛け合い、話をして良い職員室の雰囲気を作った」という記述のように、養護教諭自身ができる心のケアを精一杯実践していたのだと考えられる。学校へのマンパワーの投入や学校間の連携による支援についての記述が多いことも他地区と比べて特徴的であった。



■記述から

- 道路や情報網が寸断され、物資も人的支援もない中、教職員が避難所運営を行った。そんな中、養護教諭が求められた役割は、傷病者への対応、外部からの医療チームとの連絡調整、地域の医療機関の情報収集と周知など、コーディネーターのような役割も含まれていた。このような災害は、二度と起こらないことを祈るばかりだが、必要なもの、必要な支援、各学校での様子などを記録にまとめ、残して行くことの必要性を感じる。
- 震災で傷ついた生徒の心のケアは、SC、担任と連携を取りながら行ったが、私の精神的負担も多かったと感じます。教員みな負担を感じながら激務をこなしており、体調を崩す職員もいた。支援をする私たち教員にももう少し支援が必要だなと感じます。
- 震災による心のケアについては養護教諭が子どもの心に寄り添って対応していくことだけでなく、スクールカウンセラー等の専門機関と連携し、コーディネートしていくことの大切さを感じた。(自分で何でも背負い込むのではなく、専門機関等をうまく活用していくことが子どもにとっても心のケアの充実につながる。)
- 大変だったのは職員室の流失だ。情報、データのものが使えなくなるので、サーバーにバックアップをきちんと取っておく必要がある。
- 避難所の救護業務が終わった後は、ひたすら毎日環境衛生を少しでも良い状態に戻すため、体力的にも能力的(計画、実施、先を読む力)にも厳しい状況がずっと続いた。と同時に子どもたちは本当に細かいことまで訴えてきて手当てを必要として来室するのだが、私自身が疲れきっていると優しく受けとめてあげることができず、毎日、自己嫌悪に悩まされた。
- 感染症が起きないように、衛生状態に気を配ったが、ライフラインが整わず、思うように管理できなかった。
- 今回の震災は、被害の範囲や規模も大きかったため、学校が避難所になったとはいえ、数日間は医療関係者も応援に來れず、傷病者が出てきたときには必ず養護教諭が呼ばれ対応した。しかし、自分のできることや知識には限度があり、とても対応に苦しんだ。
- 複数校の養護教諭で保健室を利用しているのだが、二人校内に養護教諭がいるので心強く感じていました。



七夕飾り制作8 吹き流しづくり

南三陸教育事務所管内

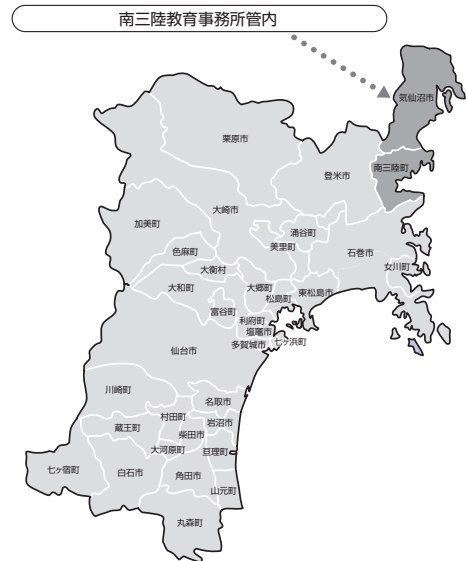
南三陸教育事務所管内では、物品の備えの必要性を感じたという記述が最も多く、必要だった物品を挙げていた内容が多かった。その中には、多様な避難者に対応した経験から、「弱者の対応も見通した物資の整備が必要」という記述もあり、物品を備える際にはいくつかの考慮すべき事項があると考えられた。

避難訓練や防災教育については「二次・三次避難場所の把握」「引き渡し訓練の必要性」や「今まで継続してきた防災学習の見直し」が必要などの記述が複数みられた。また、その中には「避難訓練どおりに自身も児童も教員も行動できた」などの記述があったことから、普段から避難訓練や防災教育を行うことにより、それが災害時に生かされ、安心安全な行動へと繋がっていくことが分かる。

避難所における対応の記述からは、「避難者の健康管理や応急手当をしなければならない」ことや「避難所は小・中の養護教諭だけでは対応できなかった」など「仕事が多岐にわたり、大変多忙であった」ことが挙げられていた。また、「衛生管理、水の管理が大変だった」「断水、停電でトイレの使用が大変だった」など、水道が使用できないことで環境衛生への対応にも苦勞し、厳しい日々の中、避難所対応に追われていた様子がうかがえた。

心のケアについては、親を亡くした児童生徒もいることから「長期的対応が必要」「安心できるような関わりを心がけたい」「喪失体験が大人になってどのように影響してくるか心配」などの記述がみられた。「これからが本当に大変な時を迎える」と感じ、「心と体のケアなど果たすべき役割は大きい」など養護教諭の決意がうかがえる記述もあった。また、心のケアを必要とする教職員が多いという記述も複数みられた。「家族や同僚を失ったことで心身の健康が心配」「頑張りすぎている」「教職員の被災者への心のケアが必要」という記述から、「生徒のメンタルヘルスケアと平行して職員のメンタルヘルスケアの必要性を強く感じていた」ことが分かる。

心のケアを行うにあたっては、「スクールカウンセラーが良きスーパーバイザーとなった」ことや「スクールカウンセラーと連携して取り組んだ」という記述が複数みられた。しかし、「スクールカウンセラーとの組織作りが難しかった」「来校回数が少ない」「他県からのスクールカウンセラーが入るものの、計画的に活用できなかった」などの意見も寄せられ、今後の災害時におけるスクールカウンセラーとの連携や派遣に関する課題がみえた。





■記述から

- 日頃から、保健室にも救急薬品、衛生薬品、衛生材料はたくさん備蓄しておく必要性を感じた。
- 避難所では医薬品が必要な方々がとても困っていました。医療機関とも連絡がとれず大変でした。健康な大人が基準の整備ではなく、弱者の対応も見通した物資の整備が必要と感じました。
- 今回のような大きな地震でも、毎年実施している避難訓練どおりに、私自身も児童や教員も行動できたことが、人的被害の防止につながったのではないかと考える。
- 避難所の衛生管理、避難者の健康管理を行うとともに、支援物資の管理、支給等、仕事が多岐にわたり、大変多忙であった。学校が再開してからも子どもたちの心と体のケア等やることは多く、災害時養護教諭の果たすべき役割は大きいと改めて感じた。
- 震災により家族や家を亡くした児童は休み時間等、保健室に来室する。震災のことを語る日もあれば語らずになんとか来室するという日もある。そういった児童を、今後も長い目で見守り、寄り添っていきたいと思っている。
- 本校では、震災前、スクールカウンセラーの来校は年5回しかなかった。震災後は他県からの支援もあり、スクールカウンセラーの来校回数はずいぶん増え、本当に良かったと思う。今後はどの学校でも、スクールカウンセラーが常駐できるようになればと希望する。いつでもいることが子どもにも大人にも支えになると思う。
- 震災後、生徒のメンタルヘルスケアと平行して、職員のメンタルヘルスケアの必要性を強く感じた。心が弱っている状況で生徒を支援していくことの限界を感じた。(頑張りすぎる職員が圧倒的に多かった。)
- 保健室の救急薬品の準備はしていたつもりでしたが、非常持ち出品や非常備品(備蓄品)は避難所となった場合、まったく不足していると感じました。



七夕飾り制作9 吹き流し完成

高等学校

防災・安全教育に関する記述が最も多かった。「水や毛布などの備蓄が必要」「最低3日分の備えが必要である」「万一に備える物が多数ある」「帰宅困難な場合の備蓄」「避難所指定でなくても備蓄は必要」など避難所指定の有無に関わらず、日頃から災害に対する備えが重要であるという意見が多かった。物品の備えとしては、学校全体として必要な物とは別に保健室でも備えが必要な物として「救急物品や薬品などの定期点検・補充」「懐中電灯やラジオ」「レスキューシート、ペーパー類を備えておく」などを挙げた意見もあった。

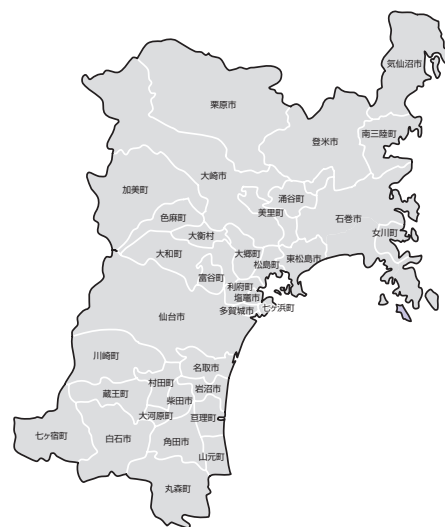
また、避難訓練・防災教育やマニュアルの必要性の記述も多かった。「停電時の安否確認方法」「帰宅困難者がした場合」「被災状況毎の避難訓練」「高校に合ったものが必要」「マニュアルだけに頼るのではなく考えて動くことが必要」など具体的内容を組み込んだマニュアル作成が必要であるとの意見も寄せられている。

次に多くの記述があったのは、健康相談である。生徒への対応では「表面上は元気でもケアが必要な生徒がいる」「長い目で経過観察を」「家族や家を失った生徒を今後もみていく」「サポート体制の充実を」「我慢している分どこかでしわよせが来るのでは」「後から問題が出てくるのでは」など長期的な対応が必要であるという意見が多かった。生徒への対応と同等に教職員への対応への内容も多かった。「オーバーワークや燃え尽きなどの予防への配慮」「家族を亡くした職員への配慮」「リフレッシュが必要」「年度途中での退職や病休が増加した」「管理職が休めていない」「息切れする前に休養が必要」など教職員自身の心身のケアが必要であるにも関わらず、休めていない実態があることが記述から分かる。

■記述から

- ・どうしても責任感の強い方が多い中で特に管理職の方が休めていない気がします。しかし、頭では休んだ方が良くはわかっているけど、休めない環境になりますので、声掛けだけでは状況を変えることは出来ません。
- ・被災した状況に差があり、宮城県内の学校の中で温度差を感じるの、県下で状況を把握し、皆で共有していきたいと思う。
- ・養護教諭は災害医療を担当する者という位置づけに置かれます。食事やトイレの対策は一般教員も担当しますが、傷病人の処置は昼夜関係なく養護教諭に連絡がいきます。医療技術と知識、体力も必要でした。避難所として住民が運営するまで、全て教職員が行うのは大変なことでした。
- ・生徒・教員・一人ひとり震災による影響の出し方が違うため養教が行う心のケアが大切であると改めて感じた。
- ・被災者であることを後回しにして、支援者にならなければならない。そのためには、心も体も強くならなければならない。
- ・ひとりで頑張る！！は長続きしない。
- ・震災後3日間は支援物資等はこないことが分かりました。学校も万が一の時のために必要な物資をとりそろえる必要があるのではないかと感じました。
- ・潜在化していく震災の影響への対応→表面化はしていないが、課題や苦しみを抱えているかもしれない子どもたちへのアプローチをどのように行っていけばいいのか。
- ・マンパワーの充実等積極的な支援体制を整える必要性を切実に感じている。
- ・表面上は元気に過ごしている生徒達も実際はケアを必要としており、そのケアはかなり時間を要することがわかった。
- ・震災は生徒だけでなく教職員へのダメージも大きく年度途中での退職や病休が増加した。

高等学校





特別支援学校

特別支援学校では、児童生徒の疾病の管理についての記述が最も多く、「電源の確保（発電機・自家発電）」「3日分の薬を保護者から預かる」「帰宅困難時に備え、数日分の備えが必要」など、児童生徒の生命の維持にはかかせない物品や医薬品の確保が重要だという意見が数多かった。「薬を処方してもらう時のために、身長体重などのデータを紙で残しておく」といった具体的な提案もあった。また、「重度障害児童生徒についての個別マニュアル作成」「個別資料の準備」が必要といった記述もあった。

また、「医療的ケアに必要な電源が確保できない時の対応の見直し」「支援学校の養護教諭は、いざという時は吸引や吸入、経管栄養などの処置を行わなければならない」という記述もあり、被災直後の緊迫した状況の中で、養護教諭に求められた役割は非常に大きかったことがわかる。

そのほか、児童生徒の避難誘導で必要なこととして、「支援学校では、地震が起きたら机の下に隠れて、教師の話聞いて、避難するという行動のパターン化が重要」「救護場所、避難場所、避難誘導等をしっかり決めておく」などの意見があった。

また、「子ども中心の支援も必要だが、家庭全体への支援も必要」「社会で、障害者について理解と対応をしてもらう」といった、社会全体で児童生徒やその家庭を支援していく体制づくりが必要との意見もあった。

■記述から

- ・本校は避難所にはならなかったが、卒業生が多数情報を求めて、あるいは困ったことがあり、来校した。学校が基地なのと思った。
- ・支援学校の養護教諭である以上、医療行為だとしてもいざというときは、吸引や吸入、経管栄養など行わなければならない使命だと改めて思った。また、生徒を無事保護者に引き渡すまでは、自分自身家には帰れず、学校に残らなくてはならないので、普段から家庭との連絡調整を大事にしていきたいと思った。
- ・消防や医療機関等の非常時の動きが知りたい（知りたかった）。優先される避難所とか巡回回数とか大まかな見通しがほしい。待っている間の判断材料にしたい。
- ・常服薬の必要な児童生徒については、1日の服薬状況を確認し、学校に泊まることを考え数日分の備えが必要。（現在は希望者のみ預かっているが、服薬している子どもの全員、特に1日分も欠かせない薬を服薬している子どもについては預かるようにしたい。）支援学校の児童生徒の精神的ストレスについて、学校として調査したり対応することも必要ではないかと感じる。
- ・震災の津波により、自宅と家族を失った生徒がおり、今まで心身の様子をみてきたが気になるような事がなく経過している。そのことが、養護教諭として気になっているが、自分の思いを表出することがあれば、しっかりと耳を傾けてあげたいと思う。
- ・社会はまだ障害者に対しての理解が少なく、避難所での冷たい目でいられない状態だったとのこと。障害者について理解と対応をしてもらうようにしていかなければならない！！
- ・養護教諭は災害後児童生徒のみならず、教員、保護者のケアも必要とされるときがあります。養護教諭自身をケアしてくれる人はいません。その点多くの養教が心の大きな傷をかかえているのではと思います。その他感じたことはたくさんありますが、今はまだ整理してお話できるような感じではありません。
- ・「つなぐ」ことが大切な仕事であること。具合の悪い人や支援が必要な人を見つけはつなげ、また地域の声を学校につなげ、「養護教諭として」だけではなく、地域を支える上で大切だと思いました。また、まず自分が元気であることが1番だということ。何よりも周りに少しでも「元気」や「笑顔」を伝えたいという思いが自分の中にあったから。

特別支援学校

